

JJA宮崎県農青協60周年によせて

～JJA宮崎県農青協 委員OBからのメッセージ～



宮崎県議会議員
黒木 正一
(平成元年～2年度委員)

かつて、“稻のことは稻に聞け、農業のことは農民に聞け”と教わったけれど、今や“農業のことは財界に聞け”、“企業化・大型化・成長産業化の大合唱である。農業は農業であるのだけれど。

さて、青年部のころ、農業祭を盛り上げようと焼きイカ店に挑戦、前夜の試食が過ぎて、当日、商品がなく大赤字。また、耕作放棄地対策として山の棚田でホウレンソウ栽培に挑戦、耕運機を谷下に落とすやら、打ち合わせと反省会が丁寧過ぎたやらでこれまた大赤字。この取り組みは事例発表まで行ったが、審査の対象にもならなかったはずだ。副題は「山師が鍬を握るとき」であった。

当時は、失敗が楽しかった。皆で目標があったからだ。

歴史を振り返れば、人口の約8割が中山間地域に暮らし、農業や林業や漁業に従事しながら、ふる里を守ってきたという生き方が1000年以上も続いてきた。それが、わずか50年で一変した社会を、今我々は生きている。

しかし、世論調査を見ると、都市住民の「農山漁村地域への移住移行」に増加の変化が起きている。20代が顕著である。青年部の出番なのである。おめでとう60周年。



宮崎県農業経営者組織協議会
会長 松原 秋一
(平成元年～2年度委員)

JJA宮崎県農青協結成60周年おめでとうございます。また、特別功労表彰を受けられます方、功労表彰を受けられます5名の方々は、長年にわたり地域のために御活躍され、その功績が高く評価されたものであり、これまでのご苦労、ご努力に対し深く敬意を表する次第であります。宮崎県の主産業である農業者の人材育成と活動の場としてJJA宮崎中央会を事務局として発足した農青協、又宮崎県の営農指導課を事務局に発足したSAP、私たち農業経営を目指す若者にはなくてはならない大きな両輪の組織です。農政は、ねこの目政策といわれるほど目まぐるしく変わった時代、国内での産地間競争の中で農業に取り組んで来ましたが、今日の時代は世界の中での競争となり、米の減反政策や日豪EPAの大筋合意、TPP協定交渉など、グローバル化の進展に伴い本県もJA連合会を含む「県域JA」の実現に向け動き出しました。本県の基幹産業である農業の将来を切り拓く中心的な役割を果たしていただけた人材が、JJA宮崎県農青協であると思います。これからも宮崎県の農業と地域の発展のために、農青協の皆様の一層の御活躍を期待いたします。



西都市長
押川 修一郎
(平成3~6年度委員長)

JA宮崎県農青協が結成60周年を迎えたことに対して、まずは心よりお喜び申し上げます。また、JAグループ宮崎をはじめ各関係機関の皆さまのこれまでのご支援に対して、深甚なる感謝を申し上げます。

西都市も今年市制施行60周年を迎え、不思議な縁を感じているところであります。

私が平成3年から6年に県農青協の委員長、平成5年に全青協の会長の時に、折しも「ガット・ウルグアイラウンド」交渉の山場を迎えており、農畜産物の市場開放阻止に向けて県内約3,500人の盟友、九州・全国の盟友とともに、要請活動、一万人集会、市場開放阻止パレード等々、組織運動を大々的に展開いたしました。

その後、細川連立政権下で米の自由化という最悪の結果となりましたが、青年農業者として、仲間とともに行動したことを今でも誇らしく思います。

組織活動の成果とは何か。望む結果につながらないこともあります、その活動のプロセスにこそ成果が隠されているのではないかでしょうか。

農業・農業者は、いつの時代も多くの課題に直面しています。既成概念にとらわれず、青年の自由で型破りな発想で行動を起こすのが農協青年部の良いところです。

未来のことは誰にもわかりませんが、少なくとも未来は今とつながっています。より良い未来を切り拓くためには、青年の持つ情熱が必要です。これからJA宮崎県農青協の活動に大いに期待しております。



宮崎県議会議員
横田 照夫
(平成3~4年度委員)

JA宮崎県農青協結成60周年、誠におめでとうございます。

私は、宮崎中央農協に合併する前の佐土原町農協の頃に農協青年部長をさせていただき、同時に県農青協委員に就任しました。その頃に、串間市で原発建設の動きがあり、県農青協上げて反対したのを懐かしく思い出します。

私が部長の時に、部員から「俺たちもゴルフぐらいしようや」という声が上がり、ゴルフコンペをすることになりました。私は、当時、ゴルフを見たこともなく、どういうものかを知るために、農協職員がゴルフをされる時にワンラウンド付いて回ったこともあります。今ではゴルフを楽しむ農家も増え、農家の社会的地位を上げる意味でも、良い切っ掛けになったのではないかと思います。

私が県農青協委員の時の委員長は、現西都市長の押川修一郎さんでした。私は、平成15年の県議選で初当選をさせていただきましたが、押川さんも初当選され、同期の議員となりました。押川さんとは、農政対策など、何でも相談できる仲間として、本当に力強く感じたものでした。

県農青協の後輩として、日高陽一さんも県議として活躍をしていますが、皆様の中からも政治を志す人が出くれることを期待したいと思います。

JA宮崎県農青協60周年によせて

～JA宮崎県農青協 委員OBからのメッセージ～



綾町農業協同組合
代表理事組合長 坂元 芳郎
(平成17～18年度委員長)

宮崎県農協青年組織協議会が昭和33年9月13日に結成されここに60周年を迎えたことは、誠に意義深く心よりお祝い申し上げます。

この60年間を振り返ると戦後の復興を経て歴史上に例をみないほどの経済成長、対日貿易赤字を背景に農産物市場開放の要求する米国議会、ガット協定の受け入れ、牛肉・オレンジの自由化、WTO農業交渉の進展、食料・農業・農村基本法の成立等、戦後の農政は抜本的に改革されることになりました。この10年を振り返れば、TPP協定の署名、経済財政諮問会議の農協解体圧力など新自由主義、経済のグローバル化は、日本の農業に大きな影響を及ぼしました。また今日では、改正農協法により理事の構成や公認会計士監査の義務づけ、中央会制度の見直し等があり、准組合員の事業利用規制のあり方の検討等、大変な時期を迎えております。

その中にあってJA宮崎県農青協は、宮崎農業の発展等にこれまで重要な役割を果たしてきました。

特徴的な点を挙げると、平成8年度から実施した「食と農」の大しさを次世代に伝える活動「農家のおじちゃんと語る会」は、平成19年に第36回日本農業賞の「食の架け橋賞」を受賞するなど全国のJA青年組織の食育活動の先駆けとして注目されました。

また、平成17年に各地で甚大な被害を与えた台風14号では、被害を受けた青年部盟友を支援するため、JA宮崎県農青協の呼びかけにより、県内各地のJA青年部盟友112名が甚大な被害のあったJA西都に結集し、倒壊したハウスの解体や破損したビニールの除去等を行いました。作業後、地元青年部長から感謝の言葉があり、それを聞いた盟友たちが涙する等協同組合の精神に基づいた組織の大切さ、結束力の強さを実感した瞬間もありました。

今後、時代が変わっていこうとも、新しい時代に即応し、その時代の改革を乗り越えてそして時代を先導していくのは、心優しい若き青年の情熱と行動です。

これからも、JA宮崎県農青協の益々のご活躍を祈念して、お祝いのメッセージと致します。

〈JA青年部 新旧シンボルマーク〉



— 緑と食料を次代へ —
NOKYO-SEINENBU

(旧マーク)



(新マーク)